

プロティノスと懷疑主義

田中 龍山

はじめに

ホワイトヘッドの、あのあまりに有名なフレーズ「西洋哲学の伝統は、プラトンについての一連の脚注からなる^①」を、あらためて思い起こせば、それは驚くべきことでもないのかもしれない。だが、同じくプラトン主義の名のもとで、一方で知の可能性を徹底的に問う懷疑主義の立場が成立し、他方で一者との合一という神秘主義的な主張が展開されるという事態は、やはりそれなりの驚きを感じざるをえないし、さらに、わが国ではまだそれほど言及されてはいないが、それら両者に接点があつたとすれば、大きな関心を集めてもいいように思われる。わたしは本論文で、古くはブレイエ工によって指摘された、プロティノスにおける懷疑主義的議論を見出したのは二か所である。ひとつは、V 3 論文「認識する諸存在とそのかなたのものとについて」、もうひとつは、V 5 論文「ヌースの対象はヌースの外にあるのではないこと、および善者について」である。^③ そしていずれの場面も、つけられている表題からも見てとれるように、認識論が議論されている文脈である。簡単にそれぞれの該当箇所の議論を追いながら、プロティノスの主張を確認し、それとともにブレイエ工が関連させたセクストスの証言を取り上げてみるとしよう。

※

まずV 5 論文である^④。プロティノスはV 5 論文で、ヌースによる知の確実性を論じているのだが、その第一節で、エピクロスやストア派の感覚論、およびそれに基づく真理論を批判したあと、第二節で、自分自身の「ヌースの対象はヌース自身である」という主張を語る。そのさいに懷疑主義的な議論が用いられているとブレイエ工は指摘するのである。V 5 論文第一節は、ヌースによ

第一章 プロティノスに見出される懷疑主義的議論

ブレイエ工が、プロティノスの著作『エネアデス』の中に懷疑主

義的な議論を見出したのは二か所である。ひとつは、V 3 論文「認識する諸存在とそのかなたのものとについて」、もうひとつは、V 5 論文「ヌースの対象はヌースの外にあるのではないこと、および善者について」である。^③ そしていずれの場面も、つけられている表題からも見てとれるように、認識論が議論されている文脈である。簡単にそれぞれの該当箇所の議論を追いながら、プロティノスの主張を確認し、それとともにブレイエ工が関連させたセクストスの証言を取り上げてみるとしよう。

る知の確実さについて次のように語るプロティノスの言葉から始まっている。

テクスト1

「そもそもヌースが——真正の、眞の意味でのヌースが——いつか欺かれて、有らぬものについて信念を持つ (*δοξάζειν*)、とだれかが主張するだろうか。否、断じて。なぜなら、ヌースが無知でありながら、どうしてなおヌースでありますだろうか。だからヌースは常に知つていなければならないし、忘れることも決してないにちがいない。そして、

その知は、彼が憶測することによつて得られるのでも、疑わしいものでも、他者からの伝聞によつて得られるものでもあつてはならない。したがつてまた論証によつて得られるものでもない」 V5.1.1-6

での存在が、もしかしたら存在するもののうちに (*ἐν τῷ σώματι* *ὑπόκειμένος*) ではなく情態のうちに (*ἐν τῷ σώματι πάθεσιν*) 根差すのではないかという疑惑が生じるのだし、またその判定者としてヌースあるいは思惟を必要とするのである。それにまた、たとえ感覚の把握するものが感覚対象のうちに存在することが承認されたとしても、感覚によつて認識されるものは、事物の似姿であり、事物そのものを感覚はとらえはしない。事物は（感覚の）外部に (*ἔξω*) とじまつているのだから」 V5.1.12-19

ここで取り上げられている感覚論は、諸家も指摘するように、エピクロスのものであろう。もちろんプロティノスはそれを批判するのだが、そのさいにプロティノスは、外部に (*ἔξω*) 存在するもの (*ὑπόκειμενοι*) は認識されえず、むしろ感覚にとらえられているのは情態 (*πάθος*) にすぎない、という議論を展開している。その議論の枠組みが、セクストスに依拠するのではないか、そうブレイエは考えるのである。ブレイエが参照するセクストスの議論は以下である。

ヌース（知性）とは、確認しておくと、プロティノス存在論の階層においては、一者の次に位置づけられるものであり、さらなる下位の階層である魂のうちにある高次の能力である。そしてプロティノスは、ここで述べられたヌースの知の確実さと対比的に、（魂のうちの低次の能力である）感覚による認識のあり方を取り上げ、次のように述べる。

テクスト3

「懷疑主義者は自分への現われを語り、思いなしをもたずに自分の情態 (*πάθος*) を報告しているだけであり、外部に存在するものについては (*περὶ τῶν ἔξωθεν ὑπόκειμένων*) 何も確言していない」 Sextus, *PH1.15*

テクスト2
「感覺される事象の場合にも——これらこそ最も明白な保障をもつてゐるようと思われるのだが——その見かけの上

懷疑主義者は、このテクスト3で言われているように、「外部に存在するもの」については、それが「情態」に現れた通りのものであるかどうか、判断はしない。なぜなら、判断する基準をもたず、それがそうであるかどうか分からぬからである。この

「外部に存在するもの」と「情態」との対比は、懷疑主義者の戦略の中心的部分をなすものであって、セクストスの他の多くの個所でも見出される。⁽⁸⁾ そしてまたプロティノスにおいても、テクスト2のみならず、他の場所でも実際に見つけることができる⁽⁹⁾ である。

さて、テクスト2に戻つてプロティノスの議論を追うと、プロ

ティノスは、この対比を利用しながら、「外部に存在するもの」に関わることをその本性とする以上、「事物そのものを感覚はとらえはしない」と主張する。そしてプロティノスの議論は、感覚認識への批判にとどまらず、さらにすすんで、ヌースもまた、もしそれが外部のものを認識するのだとすれば、「実相を持てないこと、ヌースが見るすべてのものにおいて、ヌースが欺かれることは必然である」と言われる。そうであるなら、「もしヌースのうちに真理がないとすれば、この、このようなヌースは、真理でも、真実のヌースでも、そもそもいかなる意味においてのヌースでもないであろう」⁽¹¹⁾ という結論にいたつてしまう。しかし

ながら、テクスト1で言っていたように、プロティノスにとつては、ヌースによる認識の確実性に関してはまったく揺らぎはない。それゆえ、プロティノスが導く結論は、V5論文第一節の冒頭で次のように言われる。

テクスト4

「だから、ヌースの対象を外部に(εξω)求めてはならないし、有るものたちからの印象がヌースのうちに与えられるのだといつてもならない」 V5.2.1-2

つまり、ヌースによる認識は、それが外部のものに依拠しないかぎりにおいて、懷疑の対象とならないのである。プロティノスは「ヌースは自身にとつて明白である」と言う。そう主張するプロティノスには、もはや何の疑惑もない。それは、プロティノスの次のような言葉から明らかである。

テクスト5

「したがつて、ヌースは本当の意味で真理であつて、他者にではなく、自己自身に一致しているのである。そして、真理は自己以外のことは何も語らない。むしろ真理は、それが語るところのものであるのだし、それ自身がそれであるところのものを語るのである。とすると、だれが反駁しうるだろうか。いったいどこからその反駁をもつてくるのだろうか」

V5.2.18-21

このように、プロティノスはヌースによる知の確実性を高らかに主張するのであるが、もちろんそこに何の問題もないといふわけではない。それはプロティノスにも自覚されており、それについては、ブレイエが指摘したもう一方のプロティノスの論文、V3のなかで検討されている。続いて、そちらを見てみるこ

とにしよう。

※

V 3論文は、二部構成に分けられるが、その前半部分（第一一九節）で、やはりプロティノスは、先に取り上げたV 5論文と同様に、ヌースの認識対象はヌースそれ自身であることを論じている¹³。そしてブレイエが、その節全体がセクストスの反論を議論に用いていると指摘したのは、第五節である。¹⁴第五節は、それに先立つ節での、ヌースの認識能力は感覚や理性によるそれとは異なり、「自己」が「自己」を（認識する）¹⁵一点にその特徴がある、という議論を受けて始まる。その冒頭でプロティノスは次のように言う。

テクスト 6

「では、ヌースは自己の或る部分で自己の他の部分を見るのだろうか。しかしそうであれば、或る部分は見るものだが、別の部分は見られるものであるだろう。そしてこれは、「自己が自己を」ではない。ではどうか。もしヌース全体がいわば同質的なものであって、見る部分が見られる部分と少しもちがわないのであれば。というのも、このようであれば、ヌースは自己と同じ自己のあの部分を見て、自己を見たことになるだろうから。なぜなら、見るものが見られるものと少しもちがわないのだから」 V3.5.1-7

このプロティノスの主張を、ブレイエはセクストスの次の個所と関連づける。

テクスト 7

「哲学者たちのうちのドグマティストたちが主張しているように、思考が自分自身を認識することにはならない。というのも、もしも(X)思惟が自分自身を把握するとすれば、(A)思惟の全体が自分自身を把握するか、あるいは(B)思惟の全体が把握するということは決してなく、自分自身の或る部分をそのために用いることによるかのいずれかである」 Sextus.AM.7.310

つまり、「自己」が「自己」を」という形での認識のあり方に對して、すでにセクストスは、もちろんプロティノスを想定してのことではないが、このようなディレンマ論法を用いた反論を提示していたのである。懷疑主義者の議論は次のように続いている。

テクスト 8

「(A)思惟の全体が自分自身を把握することは不可能であろう。というのも、思惟全体が自分自身を把握するとすれば、思惟全体が把握であり、把握するものであることになろうが、しかし全体が把握するものであれば、把握されるものはや何も存在しないであろう。しかし、把握する思惟は存在するけれども、把握の対象は存在しないのというのは、この上なく不合理なことである。(B)それにまた、思惟が自らの或る部分をそのために用いることはできない。というのも、その部分それ自身は、どのようにして自らを把握するのであろうか。なぜなら、もしも部分の全体が把握するのだ

とすれば、探求されるものは何も存在しないであろう。他方、もしも或る部分を用いるとすれば、その部分はまた、どのようにして自らを知るのであるうか。こうして無限逆行に陥るであろう」*Sextus,AM*7.311-312

だがプロティノスは、このよつたな懷疑主義者の「ディレンマ論法を、むしろ自らの主張、すなわち、テクスト6で語られている「ヌースがヌースを認識する」という主張を確立するために利用している、このようにブレイエは主張したのである。¹⁸⁾

第一章 プロティノスによる懷疑主義的議論の利用

さて、ブレイエの指摘はたいへん興味深く、また幾人かの研究者によつて支持されているとはいへ、プロティノスがどういう経緯でセクストスの著作に接したのか、まだ特定できる状況はない。そのようななか、オメーラは、その困難さを認めながらも、プロティノスによる懷疑主義的議論の利用は明白であると言ふ。¹⁹⁾そしてさらにオメーラは、第一章で見られたような、ヌースによる自己認識の確実さを主張するためだけではなく、プロティノスの著作のうちには、懷疑主義的議論の「さらなる別の痕跡」があると主張する。すなわち、一者を語ることの難しさを回避するためにも、プロティノスは、懷疑主義の議論を利用していふと言ふのである。この章では、オメーラの解釈を追つてみよう。まず、V 3論文に見られる懷疑主義的議論も、同様の仕方でプロティノスによつて利用されたものだとオメーラは考える。ヌースがヌースを認識するという主張を開拓するさいの問題をプロティノスは十分に気づいており、「プロティノスは、この問題にまつわる、セクストス・エンペイリコスによって開拓されたディレンマを取り上げている」とオメーラは主張する。テクスト7で見られるようなディレンマ論法は、懷疑主義者が得意とするところのものである。だが、オメーラは、「プロティノスは、この「ディレンマによる」議論が一つの選択肢をほつたらかしにしていることに気づいた」と主張する。それこそ、「主体がその知識

の目的で、懷疑主義を利用している」と言ふ。感覚に与えられた情態(πάθος)が外部に存在するもの(ὑποκείμενον)それ自身であるといふことを、つまり真理であることを、感覚も思惟も保障することはできない。テクスト2は、このことを主張しているのであって、かつ内容的に、懷疑主義の議論を受け入れているように見えるのである。もちろん、オメーラが言ふには、プロティノス自身が、懷疑主義者と同じ結論に至らねばならない、と感じが必要はない。なぜなら、前提が異なるからだとオメーラは主張する。その前提とは、懷疑主義者に、そして懷疑主義者だけでなくその論敵たちにも共有されていた前提、すなわち、認識されるもの(対象)は認識するもの(主体)の外部にある、という前提である。そしてその前提を受け入れないからこそ、テクスト5で言われるような、「他者にではなく、自己自身に一致している」という、セクストスが想定しなかつた形で、ヌースの真理性が確立されるのである。

また、V 3論文に見られる懷疑主義的議論も、同様の仕方でプロティノスによつて利用されたものだとオメーラは考える。ヌースがヌースを認識するという主張を開拓するさいの問題をプロティノスは十分に気づいており、「プロティノスは、この問題にまつわる、セクストス・エンペイリコスによって開拓されたディレンマを取り上げている」とオメーラは主張する。テクスト7で見られるようなディレンマ論法は、懷疑主義者が得意とするところのものである。だが、オメーラは、「プロティノスは、この「ディレンマによる」議論が一つの選択肢をほつたらかしにしていることに気づいた」と主張する。それこそ、「主体がその知識

の対象になるという、認識における主客の新たな関係を探る」という道であり、まさしく、テクスト6で言われている「自己が自己を」という、プロティノス自身の立場なのである。

※

では続いて、オメーラによれば「さうなる別の痕跡」に関する主張を見てみよう。それは、「言葉による説明や思惟を超えたもの、すなわち一者を思惟したり、言葉にしたりする必要が生じるさいにあらわれる諸問題を解決するためにも、プロティノスは懷疑主義を利用した」というオメーラの主張である。オメーラは次のプロティノスの言葉に注目する。

テクスト9

「原因としてかのもの（一者）を語るというようなことを、これを何かかのものの上に加えられた規定として述語づけることではなく、むしろわれわれの側のこととして語らなければならぬ。なぜなら、われわれはかのものから由来することのあるからである。否、厳密なことばづかいをするとなれば、「かのもの」とも、「ある」とも言つてはならないことになる。ただわれわれはいわばその外側のようなところを走りまわって、われわれ自身の情態をこじばに直して言おうとしている (*τὰ αὐτῶν ἐρμηνεύειν ἔθελεν πάθη*) にすぎない。そもそも時には、目指すところに近づくこともあるが、また時には、それに付随するところのいろいろの困難によって、的を離れたところに落ちてしまつじともある」⁽²⁶⁾ VI9.3.49-54

ここでは、いわゆる一者の「言い表し難さ」が述べられている。その中でオメーラが注目するのは、「われわれ自身の情態をこじばに直して言う」という表現である。そしてオメーラは、先にも挙げたテクスト3との類似性を指摘するのである。すなわち、「自分の情態を報告する (*πάθος ἀπαγγέλλει τὸ ἑαυτοῦ*)」というセクストスの表現である。ところで、第一章でこのテクスト3が言及された時には、セクストスの語る「外部に存在するもの」と「情態」との対比が、プロティノスにも見出されるという点が注目されたのであった。しかも、どちらかというと焦点が当てられたのは、「外部に存在するもの」への関わりの有無であった。しかしながらここでオメーラは、むしろ「情態を語る」という点に、懷疑主義者とプロティノスとの共通点を見出すのである。プロティノスは、決して認識されることなく、言い表せられることのない絶対者である一者を語るさいに、この懷疑主義者の用いる表現を利用した、そうオメーラは主張するのである。⁽²⁷⁾

もちろん、この解釈がたやすく受け入れられるものではないということをオメーラも自覚している。そこでオメーラは、反論として予想される、懷疑主義者とプロティノスの三つの相違点を挙げ、それらへの対応案をあらかじめ用意している。

一つ目の相違点は、セクストスが情態を「報告する (*ἀπαγγέλλειν*)」と語っているのに対して、プロティノスは「こじばに直して言う (*ἐρμηνεύειν*)」と表現している点である。しかしこの用語の違いについては、セクストスにも「こじばに直して言う (*ἐρμηνεύειν*)」という表現が同様の文脈で見出されること

から、たいした問題ではない、とオメーラは言う。⁽²⁸⁾

つづいて二つ目は、プロティノスが主張する一者の絶対的な不可知性と、懷疑主義者が言う知の暫定的ともいうべき不可知性との違いである。というのも、懷疑主義者はけつして知の可能性を否定しているわけではないからである。⁽²⁹⁾けれども、オメーラは、実際のところ懷疑主義者が行っているのは、知を否定することであって、その意味ではプロティノスが一者について述べていることと変わらない、と言⁽³⁰⁾う。

三つ目の、オメーラが言う「より重要な相違点」は、懷疑主義者による「情態の報告」が、まさにその人にとっての、その時の「情態」に限定されるのに対して、プロティノスの場合には、その「情態」は、当人にとっては明確に気づかれていないにせよ、ある何かと関わっており、その何かについての表現である、という点である。その何かとは、もちろん「言い表し難きもの」である一者である。オメーラは、以下のプロティノスの証言を、引き合いに出している。

テクスト 10

「いや、われわれが認識によつて（かのものを）持たないからといって、全然（かのものを）持たないことになるだろうか。否、かのものについて語ることはできるが、かのものそのものを語ることはできないという程度には、われわれは（かのものを）持つているのだ。というのも、かのものが何でないかをわれわれは言うのであって、何であるかは言わないものである。したがつて、われわれは後のもの（一者に

よつて生み出されたもの）を用いて、かのものについて語るわけだ。しかし、われわれが（かのものを）言い表せなくとも、（かのものを）持つことをわれわれは妨げられてはいいなのだ。否、ちょうど神がかりにあい、とりつかれた人たちが、何であるかは分からぬが、自分のうちにもつと偉大なものを持つてゐるという程度のことは知つており、自分が動かされるその動きと自分が発することばとに基づいて、動かしたものを感じする——それらと動かしたものとは異なるのだが——ようやく、われわれもかのものに對してそれと同様な関係に立つてゐるように思われる。われわれが純粹なヌースを持つ場合であるが」V3.14.5-13

つまり、プロティノスの考え方では、われわれはすべて、純粹なヌースを有するかぎりにおいて、一者に対する何らかの関係を持つてゐる。単に「情態」のうちにとどまつてゐるのではない。「情態をことばに直して言う」ことにおいて、かのものと関わつてゐるのである。この相違点についてのオメーラの説明は、プロティノスは、懷疑主義者に意識されている認識論的な限定を超えて、その表現を用いている、というものである。⁽³¹⁾

第二章 プロティノスと懷疑主義

さて、ブレイエによる指摘、さらにオメーラによる解釈を見てきたわけだが、これからは、それらをふまえて、プロティノスと懷疑主義との関係を吟味していこう。もつとも、両者の関係とはいえ、厳密にはプロティノスによる一方的な利用である。しかし

ながら、懷疑主義の議論を利用しながら、懷疑主義の攻撃から無傷であることは可能なのであろうか。というのも、先に見出された、プロティイノスの著作の中の懷疑主義的議論は、そもそも判断保留を意図して懷疑主義者によって語られたものだからである。

そういう意味で、プロティイノスによる懷疑主義的議論の利用は、はたして正当なものと言えるのだろうか。このことは、プロティイノスによる懷疑主義的議論の利用の有効性とは別に、問われるべきであろう。そこで本章では、V 5 論文と V 3 論文の議論の流れをそれぞれ定式化し、プロティイノスによる利用の有効性と、そこで語られている懷疑主義的議論の元来の意図とを交差させながら、考察していきたい。

V 5 論文

〔1〕「ヌースは常に知つていなければならぬ」 V5.1.3-4

(テクスト1)

〔2〕「感覚は事物そのものを把握しない。事物は（感覚の）外部にとどまつてゐるのだから」 V5.1.18-19 (テクスト2)

〔3〕 ヌースも、もし外部のものを認識するのであれば、欺かれるのは必然である。⁽³²⁾ V5.1.5-3

〔1〕〔2〕〔3〕より

〔4〕 したがつて、「ヌースの対象を外部に求めてはならない」 V5.2.1 (テクスト4)

〔5〕 したがつて、「ヌースは、他者ではなく、ヌース自身に一致しているのである」 V5.2.18-19 (テクスト5)

V 3 論文

〔6〕 ヌースがヌースを認識する場合、全体が全体を認識するか、或る部分が別の或る部分を認識するかのいずれかである。(テクスト7)

〔7〕 ヌースの或る部分がヌースの他の部分を認識するのではない。V3.5.1-3 (テクスト6)

〔8〕 したがつて、ヌース全体が同質なものであつて、見るものと見られるものは少しちがわぬ。V3.5.3-7 (テクスト6)

まず、V 5 論文での議論「1」から「5」を追つてみよう。最初に出発点となる「1」に関してであるが、これはプロティイノスにとっては不動である。というのも、「無知であるヌース」というのは、「ヌースをもたないヌース」となり、ある種の形容矛盾のようなものだからである。⁽³³⁾ つまり、ヌースは知を、しかも厳密な意味での真なる知をもつ、というのが、大前提となつた議論なのである。そこに「2」と「3」が、小前提として持ち出される。懷疑主義の議論はここで有効なものとして機能するのである。つまり、「外部に存在するもの」に関する知は感覚においてもヌースにおいても成立しない、という主張を、プロティイノスは懷疑主義の議論をもとに主張しているのである。そうすると、必然的に「4」さらに「5」が結論として導かれることになる。もつともそのためには、「認識は感覚によるものかヌースによるものかのいづれかである」という別の前提が必要であるが、それは、テクスト1で語られているように、推測や伝聞による認識、さらに

は論証による認識が排除されるというかたちで、暗黙に前提されていると言つていいであろう。すると、「1」から「5」にいたる議論は、プロティノスにとっては、何の異論も生じることのないものとなる。だからこそ、テクスト5のようなことが高らかに語られるのだ。そしてその中で、懷疑主義的な議論は、結論を導くのに欠かせない役割を果たしているように見えるのである。オメーラが主張したように、懷疑主義の結論にいたる心配をすることなく、ただ自らの結論を導くために利用しているように見える。

しかしながら、懷疑主義の立場からすると、はたしてどうであろうか。懷疑主義者は、何であれ議論によつて論じられる限り、論敵を判断保留という結論に導くはずであった。「外部に存在するもの」とは、「情態」と対比されるときには、まさにそれにについての判断保留を意図して用いられた表現なのである。それは、先に引用したテクスト3が語る通りである。それなのに、なぜプロティノスのような結論が導き出されるのであろうか。ひとつは、プロティノスの不動の前提「1」が、その理由であろう。「1」は懷疑主義者に言わせると、ドグマであり信念を持つこと（dogmatism）に他ならない。懷疑主義者は信念を排出させようとして議論を展開する。しかしながら実際のところ、その作業がうまくいかなかつたのは、歴史が示すとおりである。⁽³⁵⁾堅固な信念を排出させることが困難なのは、プロティノスに対してもだけではなかつたのだ。だが、それとは別に、懷疑主義の攻撃を逃れるための、プロティノス独自の対処法が、この議論の中には見出される。それはオメーラが指摘したように、認識されるもの（対象）

は認識するもの（主体）の外部にあるという前提をプロティノスが放棄した点である⁽³⁶⁾。その前提は、懷疑主義者が論敵と議論するさいの、土台となるものであった。プロティノスの、ここでの懷疑主義の取り扱いは、いわばその土台を根底から覆すものだつたのである。もはや、懷疑主義者の議論は、ただプロティノスの目論見に奉仕するだけであつて、本来の目的を果たすことはできないのである。

いや、そうであろうか。むしろ「思惟が思惟を認識する」という立場は、すでにセクストスにも知られていたのであつて、そのための議論をテクスト7で展開しているではないか、という反論は当然のことながら予想される。しかしながら、テクスト7で語られていることも、わたしがいま述べたことを裏付けるものであることを、つづくV3論文での議論「6」－「8」から明らかにしよう。

ここでプロティノスが「7」から「8」の結論を導くためには、「6」という懷疑主義のディレンマ論法による議論が前提として機能していなければならぬ。つまり、「6」で示された二つの選択肢のもとで、「7」において、「部分が部分を認識する」という選択肢が排除され、その結果として、もう一方の選択肢「8」が結論として残るのである。やはり、プロティノスによる懷疑主義の利用は、きわめて有効と言えるかもしれない。

しかしながら、ここでも本来、テクスト7で語られる懷疑主義のディレンマ論法「6」は、そもそもまったく別の意図をもつたものであつた。つまりそれは、「思惟は思惟を認識する」という主張に関する判断保留である。ディレンマ論法が懷疑主義の常

套手段であることは先に述べた。それはこういう議論である。⁽³⁷⁾ もし主張Xが成立するとすれば、それはAによるかBによるかのいずれかである。しかるに、Aであろうと、Bであろうと不合理

が帰結する。したがつて、主張Xは成立しない。つまり、懷疑主義者の提示するディレンマによれば、論敵はいずれを選択することによつても、自らの主張を引っ込めざるを得ない状況に追い込まれるはずなのである。しかしプロティノスはそうはならなかつた。プロティノスの主張にそくして言うと、「X」「ヌースはヌースを認識する」ならば、「A」「或る部分が別の部分を認識する」⁽³⁸⁾か、あるいは「B」「全体が全体を認識する」かのいずれかである。ここでプロティノスは、「A」が不合理であることは認めるが、「B」が不合理であるとは考へないのである。懷疑主義者が「B」を不合理と考えるのは、テクスト8で言われているように、「思惟全体が把握するものであれば、把握されるものはもはや何も存在しない」ことになるからである。ここにもやはり、先に述べた、認識されるものは認識するものの外部にある、という懷疑主義者の前提が潜んでいるのである。⁽³⁹⁾ 懐疑主義者は、「理性が理性を認識する」という主張を取り上げる場合でも、そもそも、認識するものと認識されるものが同一である、という考え方はなかつたのだ。対するプロティノスは、懷疑主義者が「A」と「B」を提示するときに有していた前提とは、まったく異なるった考え方を所持していた。そういう意味で、オメーラが主張したように、別の選択肢をプロティノスは見出した、と言つてもいいかもしれない。⁽⁴⁰⁾ しかもそのうえでなおかつ、懷疑主義のディレンマ論法に乗じる仕方で、「A」ではない、ゆえに「B」である、

と自らの主張「8」を導き出すのである。きわめて巧みなやり方と言わざるを得ない。

※

最後に、オメーラの主張した「さらなる別の痕跡」について、批判的検討を加えておこう。つまり、「言い表し難いもの」である一者を語るために、プロティノスは「情態の報告」という懷疑主義者の表現を利用した、というオメーラの主張に対してもある。

さて、この場合も、もしこの目的での利用があつたとしても、それはプロティノスによる一方的なものである。そうだとすると、懷疑主義者の元來の意図とずれがあつても、問題はないのかかもしれない。そしてその点で、オメーラが挙げていた、先の、懷疑主義者とプロティノスの三つの相違点についても、オメーラ自身の対応案によつて、ある程度は説明がつくであろう。しかしながら、わたしは二つの疑問を提起し、よつてこの意味での利用があるとするオメーラの解釈は説得力が弱いのではないかと主張したい。

まず第一点目として、オメーラが言う「より重要な相違点」には、やはり利用と言うにはあまりに大きなずれがあるのでないかとわたしは考える。懷疑主義者の「情態」が、あくまでもその人の内的なものであるのに対して、プロティノスのそれは、「ある何か（一者）との関わり」を告げるものである、という相違点である。オメーラは、「懷疑主義者によるそういうした議論が依つて認識論的な制限を拒絶するという仕方で」、プロティノスは懷疑主義的表現を採用している、とした。しかしそれでは、もはやその表現は懷疑主義的な文脈を完全に離れたものであつ

て、仮に同じ「情態」という言葉が使われているとしても、利用とは言えないであろう。というのも、懷疑主義者の言う「外部に存在するもの」と「情態」との区別は、「外部に存在するもの」にコミットしないというまさに懷疑主義の本質にかかわるものであつて、「情態の報告」が、個人の内的状態という制限を超えて、「ある何かとの関わり」に重点が置かれて語られることはあり得ないからである。

さらに第二点目。プロティノスが懷疑主義的な議論を利用しながら、その攻撃を気にせずにすんだのは、懷疑主義者たちの議論の土台から離れたところで、「自己が自己を認識する」という自身の立場を展開したからであつた。それにもかかわらず、「ある何かとの関わり⁴²」を主張することは、逆に懷疑主義者たちの土台の上にふたたび乗つかつてしまうことになるだろう。というのは、ヌースがヌースを認識するという次元をはなれて、さらに一者というヌースにとつては他なるものが語られるとき、「自己が自己を」というプロティノスの見出した地点、すなわち、それによつて懷疑主義の攻撃を無効にすることができた地点が失われるからである。けつしてそれは、プロティノスの意図することではないであろう。なぜなら、そのようにまでして、「情態を報告する」という懷疑主義の表現を、一者を語るために用いる利点は何一つ見出せないからである。以上、二つの点から、わたしは、プロティノスは、オメーラがここで言うような目的で懷疑主義の議論を利用してはいない、あるいは、もしプロティノスが利用しているのであれば、それは有効なものではない、と考えるのである。

さいごに

さて、ブレイエが指摘した、プロティノスに見出される懷疑主義的議論をもとに、オメーラの解釈を手掛かりとしながら、そこでのプロティノスの論点と、もともとの懷疑主義者の意図を交差させながら、考察を進めてきた。そこに垣間見えてきたことは、プロティノスの巧みさ、および両者の議論のずれである。おそらくプロティノスにとつては、懷疑主義者の議論は、脅威には感じられず、むしろ自らの主張を展開するうえで役に立つ素材のひとつと考えられていたのではないか。それは何より、プロティノスが懷疑主義者の土台とは別のところで議論をしていったからである。つまり、繰り返しになるが、プロティノスの「自己が自己を認識する」という立場である。そもそも懷疑主義者は、外部に存在するものから得られた情態に同意をするか否か、をめぐつて、論敵と議論してきた。外部に存在するものを度外視して、同意（認識）するものが同意（認識）されるものと同じ、というようなことは、懷疑主義者には想定されていない。つまり、両者には決定的なはずがあるのであつて、そのそれが、プロティノスに巧みな利用を可能にした、と言つていいだろう。わたしは、その点で、プロティノスは基本的に懷疑主義的議論の利用に成功していると考へる。また、このプロティノスの立場は、懷疑主義の克服に道を開くものであつたのではないかと思う。⁴³

では、利用された側の懷疑主義者は、このプロティノスの議論を聞いてどう考へるのであろうか。そのつど論敵の主張を巧みに利用しながら論敵を判断保留へと導こうとするのが、懷疑主

義者の本領であった。その懷疑主義の議論が利用されたのである。

わたし自身は、この問いに判断を差し控えた」と思つたが、少なくとも、オメーラが（二者への関わりという点でも）懷疑主義を利用したところ解釈の延長線上で）「わんこすれども、「懷疑主義は、プロティノスにおいて、見識のある感謝や、創造的な批判にあぐりあつた」といった思想を、懷疑主義者たちが持つじふばなこよみに思われる。

Emilsson,E.K., "Plotinus on the Objects of Thought", *Archiv für Geschichte der Philosophie*.77,1995
Harder,R., Beutler, R., Theiler, W., *Plotins Schriften* III-b, Hamburg,1964
—, *Plotins Schriften* V-b, Hamburg,1960

Meijer,P.A., *Plotinus on the Good or the One (Enneads VI, 9)* Amsterdam,1992
O'meara,D.J., *Plotinus: an introduction to the Enneads*, Oxford,1993

—, "Scepticism and Ineffability in Plotinus", *Phronesis*. 45.4,2000

Rappe,S., "Self-knowledge and subjectivity in the Enneads", in Greson.L.P.(ed.), *The Cambridge Companion to Plotinus*, Cambridge,1996

Wallis,R., "Scepticism and Neoplatonism", *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*,36.2.Berlin,1987

プロティノスの著作からの引用は、水地宗明、田之頭安彦他訳『プロティノス全集』（一九八六—一九八八年、中央公論社）に、セクストスの著作からの引用は金山弥平、金山万里子訳『セウロノ主義哲学の概要』（文中および注ではPHと略記）（一九九八年、京都大学学術出版会）、『学者たちの論駁』（AMと略記）（二〇〇六年、同）に依拠したが、論述の都合上、若干の変更を加えやむを得ただいた。

【註】

【証】

- Armstrong,A.H., *Plotinus Enneads* V,Loeb,1984
Beierwaltes,W., *Selbsterkenntnis und Erfahrung der Einheit*, Frankfurt,1991
Bréhier,E., *Plotin Ennéades* V, Paris,1931
Crystal,I., "Plotinus on the Structure of Self-Intellection", *Phronesis*.43.3,1998

(一) Alfred North Whitehead, *Process and Reality*.p.39.
Cambridge, 1929.

(二) じの「アカデメイア派のじふであるが、以下本論で論じる懷疑主義はセクストスのじふのセウロノ主義を指す。両者の懷疑主義は、厳密には様々な点で異なるが、重なる点も多くあり、本論での議論を展開する上で、基本的に両者を

区別する必要はないと言える。それらの回答については、

拙著『セクストス・エンペリオスの懷疑主義思想』(110)

○四年、東海大学出版会) 第一章「エコロニ主義とアカデメイド派」四九一六回頁を参照いただきたい。

(∞) Bréier,37-38,40,83,85. また Wallis によると、プロ

トロヘスの懷疑主義との言及を指摘した最初の論文は、Monrad,M.J. による一八八八年に出版された“Über

den sachlichen Zusammenhang der neuplatonischen Philosophie mit vorhergehenden Denkrichtungen, besonders mit dem Skepticismus”, *Philosophische Monatshafte*,24 よりある(Wallis,911)。

(4) ▶の論文は、III 章、IV 章の二章で、グノーシス派批判を展開した一つの作品の一部であるが、論述は、

(5) プロトティノス以外にも多くの論者からの立場を述べるが、アリストテレス、ペリペトス派に由来する議論であると主張する論者もいる。 Cf.Emilson,25.

(6) Bréier,83,85.Cf.Harder[1964],401. また、同じくの H. P. クロスの注釈や、日本語訳者による訳文は、

(AM8.9,AM7.203)。だが一方、アーマストロングは、「同じくプロトティノスが利用してくる議論は、懷疑主義よりむしろアーマストロングのものである」として PH13-15 を批評している。

(7) ブレーハーは、H. P. クロスによる PH13-15 を批評している。

(∞) Sextus,PH1.19-20,94,PH2.51,72.

(σ) VI6.13.57-59. ὅπε τὸ «ποῦτο» σημαίνει αὐτόν, ἀλλ' ἔστι πρᾶγμα

ὑποκείμενον,

V5.1.52-53.

V5.1.60-62.

(12) V5.2.15.

(13) 後半部分(第10—17節)は、マースによる直知を超えていたり、者があのまじめが論じられてくる。

Bréier,40.

(14) V3.4.29.

Bréier,40-41.

(15) V3.5 に闇について Harder[1960],375,Beierwaltes,101,Rappe,254, Crystal,264-266 や V5.1 に闇について本論文注五を参照。

(16) O'meara[2000],240,244.n.10. オメアーラは、プロティノスがアヌリナスを介してセクストスの思想に接した可能性を指摘している。

(17) O'meara[2000],240.

O'meara[2000],245.

(18) O'meara[2000],240,245-246.

O'meara[1993],39.

(21) O'meara[2000],245-246.

O'meara[1993],40.

O'meara[2000],246.

O'meara[2000],247.

(26) 同じくの訳文は、一部、日本語訳者が依拠してくる写本に

ではなましく、O'meara が依拠してくる写本にしたがつた訳

(27) O'meara[2000],248.

(28) O'meara[2000],248. オメーラは、セクストスの *AM*9.164 を指示していぬ。

(29) オメーラは挙げていないが、次のセクストスの証言から明らかである。「次に新アカデメイアの人たちであるが、たしかに彼らは何ものも把握不可能であると主張しているけれども、たぶん、何ものも把握不可能であると語るまさにそのことにおいても彼らは懷疑派とは異なっているだろう。なぜなら、彼らはそのことを確言するのであるが、懷疑主義者の方は、何いかの物事は把握されることがあるかもしないと考えるからである」 *PH*1.226.

(30) O'meara[2000],248.
(31) O'meara[2000],248-249.
(32) もののじの結論に注めおでにも、「もしステースとその対象がくびきにつながっているなら」といったさまざまな可能性を問う段階的な議論が展開されている。

(33) Wallis,918. また、テクストーの中「なぜなら、ステースが無知であつながら、じかしてなおステースでありうるだらうか ($\Pi\omega\varsigma\gamma\alpha\ddot{\nu}\epsilon\pi\iota\nu\omega\varsigma\alpha\iota\omega\tau\alpha\iota\omega\nu\epsilon\iota\eta;$)」と云われている。Cf. II9.1.46-50.

(34) 「信念を持ついの」 ($\delta\omega\varsigma\acute{a}\zeta\epsilon\nu$) に対しては、プロティノスも否定的である。テクストーを参照。

(35) 懐疑主義は確かに影響を与えたが、それでもやはりドグマティストたちは歴史の中で存続し続けた。

(36) O'meara[1993],39. また、Crystal も「プロティノスは、認識する主体と知性的対象とのあいだの関係を作り変えた」

といった表現をしていぬ (Crystal,266)。

(37) もともと選択肢は一つに限られるわけではなく、その時々の可能性によって増えることもある。そして、例えばプロティノスが VI9.2.32-47 で展開していくこの種の議論も、懷疑主義にさかのぼればいのでもない議論方法であると指摘する論者もいる。Meijer,119.

(38) テクストーおよびテクスト⁸においても、X、A、B という記号で示している。

(39) 厳密にいへば、この場合も、「懷疑主義者とその論敵がどもに共有している前提」である。

(40) O'meara[1993],40.
(41) O'meara[2000],250.

(42) 傍点は筆者によるものであるが、オメーラは relate, refer to という単語を使つていて。Cf.O'meara[2000],249.
(43) 懐疑主義の克服といつて論点に関づて Rappe はプロティノスの立場とデカルトの立場に *subjective truth* を関連させ、たいへん興味深い議論を展開している。また、懷疑主義の克服が論じられるときに、「それ」が大きな役割を果たすことを、かつて筆者は、アウグスティヌスの議論にそくして論じた。拙論「アウグスティヌス『アカデメイア派論駁』における懷疑論批判」『中世哲学研究』京大中世

哲学研究会、一〇〇一年、五七頁参照。

(44) O'meara[2000],251.